

2021年度  
入学試験問題

国 語

2月1日 午前

受験番号	氏 名

中村中学校



問題は次のページからです。

□ 次の(1)～(10)の——線のカタカナを漢字に直して答えなさい。

- (1) 防災リュックにかい中デントウを入れる。
- (2) この船にはレーダーがソウビされている。
- (3) 全国的なキボの体育大会に出場した。
- (4) ヨクネンには、この橋も完成しているだろう。
- (5) おかしをキントウに分ける。
- (6) ジョウキ機関車を見に行く。
- (7) 入浴は、ケツエキのじゆんかんをよくする。
- (8) つかれたときは、温泉にカギる。
- (9) 水がじゃ口からイキオいよく流れ出た。
- (10) 子どもの時、よく木のミキによじ登った。

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

(設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。)

\* 字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

さて、きみはスローフードと**ア**いうことばを聞いたことがあるんじゃないかな？ ファストフードの流行のおかげで失われそうなおいしい食べものを守れ、という、北部イタリアの小さな村に住むとびきり食いしん坊のおじさんたちがはじめた運動のことだ。今では世界中に広まって八万人がこの運動に参加するほどになっている。ぼくももちろん参加している。食**エ**べること抜き**ぬ**の人生がないように、スローフード抜き**①**のスローライフなんてありえない、とぼくは思っているのだから。

それにしてもスローフードとは変なことばだときみは思うかもしれないね。「ゆつくりな食べもの」だなんて。でもその疑問もまた「食べものは生きものである」ということからゆつくり考えていけば解けるはずだ。

生きものにはそれぞれ**②**の「生きもの時間」がある。ニンジンにはニンジン時間があり、ニワトリにはニワトリ時間がある。どの生きものもそれ独自の時間をそれぞれのペースで生きている。生きものである動植物は成長し、次の世

代を残すための繁殖活動をし、古い、死んでゆく。途中で他の生きものに食べられるものもあるし、死んでから栄養となつて他のいのちを育むものもある。個々の生きもの時間が鎖のように長く連なつて、種全体の時間をつくっている。

長い歴史の中で人間は、こうしたさまざまな種の生きもの時間に学び、そのペースにうまく自分たちのくらしのペースを合わせるようにして生きてきたはずなのだ。木の実や草の根を食べものにする人たちは、**a**、その木や草が生きるペースをよく知って、それに合わせた生活をするだろうし、動物や魚の肉を食べる人たちは、えものの生活のリズムをちゃんどつかんでおく必要がある。欲ばつていっぺんにたくさんとつてしまえば、次の世代を産み、育ててゆく動植物のペースが追いつかなくなつて、結局、自分たちの食べるものがなくなつて困ることになる。**b**、自分が生きていくためには、急がず、あせらず、相手の時間に合わせる**③**ことが必要なのだ。

農業や**ほくちく**牧畜や**ようしよく**養殖をする人たちは、ただ相手の生きもの時間にこちらのくらしを合わせるだけでなく、**c** 一歩進めて、相手を自分のくらしのペースの中に引き入れることによつて食べものをもつと確実に手に入れようとする

る。イネやムギは、人間がつくった田んぼや畑で、野生の植物だったときはちよつとちがう時間や空間の中に生きて、多くの実をみのらせ、人間が一年を通じて食べる主食となる。牛や豚やニワトリなどの動物は、人間のつくった農場や牧場で、これもまた野生の動物とはずいぶんちがうくらしぶり——自分で探さなくても餌が与えられる分、ずっとファスト——をしながらも、それぞれの動物に独特の時間を生きて、やがて人間の食べものとなる。

今世界中に生きている六十数億人が食べる食べものほとんどは、農業や牧畜や養殖によって得られるものだ。大昔にはすべての人間がやっていた狩猟、採集、漁労——野生の動植物や天然の魚介類をとる活動——は、ほとんど

人少なくなつてゆく。それは、人間が入りこんできたために動植物の住んでいた場所が減つたからでもあり、また人間があまりにたくさん動植物をあまりにも速いペースでとつてきてしまったからでもある。では、人間の時間と動物の時間が歩みよるようにしてできたはずの農業や牧畜や養殖の方はどうなつていよう。生きものを相手にするこつとした仕事のことをまとめて第一次産業という。昔のお百姓さんたちに比べて、最近の第一次産業を仕事とする人々は、どんどんせつかちになつてきていて、生きも

のたちが生きる時間のスローなペースがもう待ちきれなくなつていようなのだ。

第一次産業で働く人たちのことを生産者という。食べものを「うみ出す」人、という意味だ。でも食べものは生きものなのだから、その生きものを人間が「うみ出す」というのは奇妙ない方だ。神様でもないのに、人間がいのちあるものを「生産」できるわけがないのに。ぼくが尊敬している食べもの研究家の結城登美雄さんによれば、農民は「生産者」などではなく、「待つ人」だ。待つことが上

手な農民はこちらの都合ばかりを一方的に押しつけないで、野菜の都合にも合わせるこつができる。「むこつからハクサイが来たら、ハクサイの一夜漬けにしよう。キャベツが来たらロールキャベツで、というように」。農業とはそんなふうになつて作物が生きる時間を大切にしながら、人間の時間と作物の時間とのズレをうまくおろ合わせる仕事だ、と結城さんは考へる（『現代農業別冊・青年帰農』）。

前にぼくは、狭い場所にギュウギュウづめにされたニワトリや、ふつうより何倍も速く育つようにつくり直されたサケやレタスの話をしたね。それはみな、ぼくたち人間がいかにか生きるものたちの時間を大切にしていなかつたか、を表わしているだろう。いや、それどころではないかもしれない。

ぼくたちはもう、「食べものは生きものである」というあたり前のことさえ、忘れかけているのではないだろうか。

⑤ 生きものとしての扱いを受けない生きものは不幸せにちがいない。それは、人間らしい扱いを受けない人間が不幸せなのと似ている。動物や植物に幸せも不幸せもない、と考える人もいるだろうが、ぼくの考えはちがう。ぼくは『フアーブル昆虫記』で有名な昆虫学者のフアーブル（一八二三—一九一五）の、どんな生きものにも「生きるよろこび」があるという考えに賛成だ。彼は虫たちが鳴く理由をつきとめるためにいろいろ調べたすえに、こういう結論に達した。

「ギリギリスのバイオリンや、アマガエルの風笛や、カンゼミの歌は、きつと生きるよろこびを、虫それぞれのやりかたでうたっているのだと思うよりしかたありません」（『フアーブル昆虫記・上』）

生きるよろこびを奪われた生きものたちの実や肉や卵がぼくたちの食卓にやつてくる。不幸せなのちをいただいて、果たしてぼくたちのいのちは幸せになれるのだろうか、とぼくは疑わずにいられない。ぼくたちの「生きるよろこび」もまた、自分が食べものとしていたたく生きものたちを生きものらしく扱えるかどうかにかかっている、という気がするんだ。

スローフードということばの意味について考えてきたことを、このへんでまとめよう。それは単にゆつくり食べようということじゃない。それも大事だけど、もっと重要なのは、「I」ということを出すこと。そして、その生きものまわりに流れるゆつくりとした時間を尊重すること。つまり、食べものを養殖し、栽培する人も、買う人も、食べる人も、みな「上手に待てる」ようになること。

食卓にはいろんな時間が混じりこんでいる。土の中の無数の微生物が植物を育てる時間。季節ごとの風や雨や虫。雨が降り土にしみ込み、植物の根がそれを吸い上げる時間。植物の成長に立ち会って、そつと手をそえる農民たちの時間。彼らのくらしのリズム。食物が都会へと運ばれてくる時間。調理や盛りつけの時間。そんないろんな時間の積み重ねの上に、今、こうして家族や友人たちが食卓を囲んでおしゃべりしたり笑ったりしながら、ゆつくりとした時の流れを楽しんでいる。また仏壇や神棚に供えた食べ物を通して、ぼくたちは、今はもうこの世にいない人々の時間ともつながっている。

⑥ そう思うと、食卓ってすごい場所だ。きみはそこでふと

目を閉じてちよつと神妙しんみょうに、「いただきます」という。それをいわないとなんかもの足りなくて変な感じがするだろうか？ それもそのはず、ぼくたちは本当にたくさんのいのちのおかげで、こうして生きている。ありがたいことだ。そのありがたさこそが、食べもののおいしさの最大の秘密なのではないだろうか。

（辻信一『ゆつくり』でいいんだよ』筑摩書房）

問一 —— 線①について、本来この後に来るべき内容は、本文中の~~~~線ア〜エのうちどれですか。一つ選び、記号で答えなさい。

問二 —— 線②「生きもの時間」とはどのような時間のことですか。本文中のことばを用いて、二十字以内で答えなさい。

問三 —— 線③「種全体の時間をつくっている」とはどういうことですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、個々の生きものは、人間のためにいのちを投げ出すが、たくさんいるその種のいきものが生き残っていけるということ。

イ、個々の生きものは、いずれ死んでしまいが、繁殖活動によりその種は永遠にいのちを受け継いでいけるということ。

ウ、個々の生きもののいのちが終わることで、初めて同種のいきものの栄養となり、次の世代を養っていけるということ。

エ、個々の生きもののいのちが他のいのちを育み、いのちの連鎖れんさによって多くのいのちが繋がってけるということ。



問四

に入る適当な言葉を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア、つまり                   イ、もちろん

ウ、たとえ                   エ、さらに

問五

—— 線④にあるように、農民は「待つ人」という考え方では、農民の仕事はどのようなものになりますか。適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、生きものの時間をうまくコントロールして、人間の時間に合わせて作物が育つようにすること。

イ、生きものの時間を考え、人間の時間を調整しながら、作物が育つようにすること。

ウ、人間がちょうど必要とするタイミングにあわせて、作物が育つようにすること。

エ、無駄なくスペースを使い、生きものの時間を調整して作物が育つようにすること。

問六

—— 線⑤と同じ意味の表現を本文中から十六字でぬき出して答えなさい。

問七

にあてはまる言葉を本文中から十二字でぬき出して答えなさい。

問八

—— 線⑥「食卓つてすごい場所だ」とありますが、その理由を説明した次の文を完成させなさい。  
  とも二字の熟語が入ります。   
は本文中からぬき出して  は自分で考えて答えなさい。

いろいろな  の積み重ねの上に、楽しい時の流れが生まれ、それがたくさんのいのちのおかげだと気づいて、  の気持ちを生むことができるから。

問九

著者の「スローフード」に対する考え方をふまえて、  
あなたが日々の食事について考えたことを書きなさい。

③ 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

(設問の都合上、本文を改変、省略したところがあります。)

\* 字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

裕太とケンカをした。二学期の終業式の日のことだ。<sup>①</sup>「絶

交だ、ばーか！」と向こうが言うから、こつちも「一生

A きかねーよ！」と言つてやった。

ケンカをしていないときの裕太はクラスで一番気が合うヤツで、あいつもぼくのことをそう思ってくれているはず  
5  
だけど、すぐにぶつかつてしまう。で、いつも、なんとなく、自然に、よくわからないけど、仲直りする。

「そういうのがほんとの友だちなよ」とママは言うし、

パパも「親友はケンカしてナンボなんだ」と笑う。でも、

③ 「親友」つて、そんなの照れる。あいつだつて困つてしま

うだろう。ぼくらは小学五年生で、「親友」つて、なんて

いうか、もつとオトナの世界じゃん？

とにかく、ぼくたちはまたケンカをした。四月に同じク  
ラスになつてから、これで通算十二回目のケンカ——野  
球でいうなら、十二回のオモテの「ケンカ」が終わったと  
15  
ころで、ふだんならすぐにウラの「仲直り」が始まるんだ  
けど……。

④

今回のケンカはタイムミングが悪かつた。絶交したまま冬

休みに入つてしまひ、しかも、あいつ、冬休みの初日から、

お父さんが単身赴任<sup>ふにん</sup>している札幌<sup>さっぽろ</sup>に家族で出かけてしま  
つた。

顔を合わせないと仲直りはできない。ケンカから何日も  
たつと、ぶつかつた理由がなんだつたのかよく思いだせな  
くなつて、つてことは「ごめんな」を言わなきゃいけない  
のが裕太なのかぼくなのかもわからなくなつて、「じゃあ  
25  
オレから謝つたら負けだよな」と思つてしまふ。

年賀状、迷つたけど、裕太には出さなかつた。

だつて絶交中だもん。『今年もよろしく』つてへんだし、

『去年はお世話になりました』なんて、もつとへんだし。

あいつ、ぼくに出すのかな。だつたらぼくの勝ちだ。返

事に『今年もよろしく』つて、まあ、一言だけ、テキスト

に書いてやつてもいいけど。

冬休み三日目に年賀状を書き終えて、近所のポストに投

函<sup>かん</sup>した。<sup>⑤</sup>はがきは一枚だけ余らせてある。でも、裕太から

来なかつたらムカつくよな、三学期からも絶交つづけなき

やな、お年玉の金額の比べっこしようぜつてケンカの前に

は盛り上がったただけだな……なんてことを思いながら

自転車をとばしていたら、同級生の香奈にばったり会った。女子に会っても無視、とふだんから決めているぼくはかまわずすれ違ちがおうとしたけど、「ちよつとちよつと」と呼び止められた。

「……なんだよ、オレ、忙いそがしいんだよ」

「ねえ、知ってる？ 裕太くんのこと」

「うん？」

「あの子、転校しちゃうんだって」

「マジ？」

香奈のお母さんが、二学期が終わる少し前に裕太のお母さんから聞いた。お父さんはあと四、五年は札幌の支社に勤めることが決まったので、四月からお母さんと裕太も札幌に引こ越すことになった——らしい。

「ふーん、いいじゃん……札幌だと、ジンギスカン食えて。」

⑥あと、ほら、ラーメンもあるし」

無理やり笑った。でも、声が震ふるえた。香奈と目が合うと、なんかカッコ悪いことになってしまっただったから、そっぽを向いたまま自転車のペダルを踏ふみ込こんだ。

⑦次の日から、ぼくは毎日、裕太の家のすぐ前にある公園に出かけた。タコあげをして時間をつぶしながら、ちらちらと裕太の家のほうを見た。

あいつが札幌から帰っていて、うまいぐあいに玄関げんかんから外に出て、あいつのほうから声をかけてきたら、「偶然ぐうぜんじやーん」とナニゲに言つてやつて、「転校するんだって？」とナニゲに聞いてやつて……このパターンだったら仲直りしてやつてもいいかな、つて。

でも、裕太の家のドアは閉まったままだった。電話をかけてみようかとも思っただけど、こつちが先に謝るみたいで、やっぱイヤだった。

大みそかの夕方——陽ひが暮れるまで公園でねばつても、裕太は帰って来なかった。

二〇〇四年が終わる。

年越しそばを食べているとき、「どうした、なにブーツとしてるんだ？」とパパに言われた。

朝になった。二〇〇五年が始まった。でも、ぼくはしょんぼりしたまま、お年玉をもらっても元気が出ない。おぞうにおかわりしなかったら、「おなかでも痛いのか？」とママに心配そうに聞かれ、「なんでもないよ」と逃にげるように自分の部屋に駆かけ込んだ。

裕太はもう帰って来ないだろうか。転校するのは四月だと言つてたけど、急に一月から転校することになったのかも知れない。だったらもう会えない。電話をかけてみれ

ばよかった。ケンカなんかしなきゃよかった。つていうか、  
ケンカしたあとすぐに仲直りすればよかった。「ごめん」  
つて、「悪い」つて、いまなら簡単に言えるのに。

「年賀状来てるぞー」とパパに呼ばれた。

重い気分のままりビングに戻って、はがきを分けていた  
ら——。

あった。

裕太からの年賀状、来てた。

『あけまして ごめん』

つて、ばーか、裕太。それにさ、『今年もよろしく』つ  
てさ、あとちよつとしかないじゃん、オレらの「今年」つ  
て……。

ダッシュでまた自分の部屋に戻って、とつておいたはが  
きに返事を書いた。

『A H A P P Y N E W こつちもごめん』

照れくさいけど。

なんか、自分でもへへッと笑っちゃうけど。

ポストに入れたら時間がかかるので、直接、あいつの家  
の郵便受けに入れた。

そのまま公園でタコあげをしながら、ドアの開く瞬間  
を待った。やっぱりまだ帰ってないのかな。ほんとうに、

80

85

90

95

100

あいつとはもう遊べないのかな。

まぶたの裏が急に熱くなった。胸がどきどきして、息が詰  
まる。風に乗って空にのぼつていくタコをじつとにらみつ  
けた。

きれいに晴れわたった青空に、ぼくのタコだけが浮かぶ。  
軽くジャンプしたら、タコにひっぱられて一緒に空にの  
ぼつていきそうだ。札幌まで飛んでっちゃうぞお、びつく  
りすんなよお、なんてくちびるをとがらせていたら、空に  
タコがもう一つ浮かんだ。するする、するする、と——  
ぼくのタコを追いかけるように空をのぼつていく。

驚いて振り向いた瞬間、思わず「うわわっ」と声をあ  
げそうになった。

裕太がいた。こつちを見て、やつと気づいたのかよばー  
か、というように得意そうに笑って、すぐに空の上のタコ  
に目を移した。

ぼくも、ふんつ、と自分のタコを見つめる。

「きんが、しんねん」と裕太が言うので、「がしよーつ」  
と返事をしてやった。

そして、ぼくはタコを見つめたまま、一歩だけ、裕太に  
近づいた。

「おまえ、ずっと留守だっただろ」

110

115

120

105

「うん。ゆうべ帰ってきたんだ、札幌から」

また一步、近づいた。なんとなく、あいつも同じように、こつちに近づいてきてるみたいだ。

「年賀状、ウチまで持って来たのかよ」

「……出すの忘れてたんだよ」

「オレ、おまえに出したっけか？」

なーに強がってんだよ、ばーか。

また一步、また一步。

「裕太、転校しちゃうってマジ？」

「うん……三月までこつちだけど」

また一步、また一步、また一步……。

「遊びに来てもいいからな、札幌に」

いばるな、つて。

「札幌って寒いじゃん」と言っつてやった。

すぐになにか言い返してくるだろうと思っつていたら、裕

太はそれきり黙だまつてしまった。

やがて、裕太がハナをすすする音が聞こえてきた。

「遊びに行くから、マジ、死んでも行く」

あわてて言っつたばくの声も、ハナ詰まりになつてしまつた。

140

ぼくたちはまた黙り込んだ。空に浮かぶタコを並んで見

つめた。<sup>⑨</sup>二つのタコは同じ高さで風に揺ゆれながら、ビミョ

ーにくつついたり離はなれたりを、いつまでも繰り返くっていた。

（重松清「あいつの年賀状」

『はじめての文学』文藝春秋所収）

130

135

問一 ——— 線①、②と同じ成り立ちの熟語を次から選

び、それぞれ記号で答えなさい。

ア、日照      イ、絵画      ウ、立案

エ、内外      オ、青空      カ、未知

問二 A にあてはまる語として最も適当なものを次

から選び、記号で答えなさい。

ア、顔    イ、耳    ウ、鼻    エ、口

問五 —— 線⑤とありますが、「ぼく」のはがきは余っ

ているのに、裕太に年賀状を出さないのはなぜですか。理由として当てはまるものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア、ケンカの原因もよくわからなくなり、謝ろうにも謝れなくなったから。

イ、裕太とは親友なので、別に年賀状を送らなくても大丈夫だだいじょうぶと思ったから。

ウ、裕太が四月から札幌に転校してしまうことを知らなかったから。

エ、絶交中の相手にどのような文を書けばいいかわからなかったから。

オ、今札幌にいる裕太に年賀状を送ってもいつ見られるかわからないから。

問三 —— 線③とありますが、それは「ぼく」が「親

友」をどのようなものだと思っているからですか。

本文中の言葉を用いて十字以内で答えなさい。

問四 —— 線④とありますが、このことによつてどの

ような機会が無くなりましたか。二十字以内で答えなさい。

問六 —— 線⑥の理由として最も適当なものを次から  
選び、記号で答えなさい。

- ア、香奈がうそをついていると思ったから。
- イ、香奈に動ようを見せたくなかったから。
- ウ、本当はジンギスカンに興味がないから。
- エ、引っこしの事実を知らなかったから。

問七 —— 線⑦の目的は何ですか。二十五字以内で答  
えなさい。

問八 —— 線⑧とありますが、この時の「ぼく」の気  
持ちとしてあてはまらないものを次から選び、記号  
で答えなさい。

- ア、裕太との別れを考え、こみ上げてくる涙を必死  
にこらえようとしている。
- イ、自分は暗く沈んでいなのに、風に乗って上つてい  
くタコにねたましさに似た気持ちを持っている。

ウ、裕太の家が気になつて仕方がないが、タコをなら  
むことによつて気をまぎらせている。

エ、裕太とケンカしたことを思い出して、その収まり  
きらない怒りをタコにぶつけている。

問九 —— 線⑨とありますが、この二つのタコは何を  
表していますか。具体的に答えなさい。



問十 この物語について述べた次のア～カについて、正しければA、正しくなければBを解答らんに入れなさい。

ア、地の文を「ぼく」の目線や言葉づかいではじめから終わりまで書くことで、「ぼく」の気持ちを理解しやすくしている。

イ、「ぼく」が「女子と会っても無視」と決めているのは、女子に会っても何を話していいかわからず恥ずかしいからである。

ウ、「二〇〇四年が終わる。」に一行を使うことによつて、ただ単に年が暮れるわけではないということの意味している。

エ、本文中に——や……をたくさん使うことによつて、文章を鮮やかなものにしたという作者のこだわりがある。

オ、裕太と「ぼく」のタコあげの場面では、お互い一歩ずつ近づきながらも、言葉では正反対の態度を取っている。

カ、あえてカタカナ言葉をたくさん用いることで、現代的な物語であることを伝えようとしている。

以下余白です。